



住吉教会 2015 年度テーマ
「殉教者の霊性を生きる」
—信仰刷新の年—

人間苦と摂理

傘木澄男神父

大津波に無数の人々が呑み込まれたとか、大勢の信者が礼拝のさなか突然の大地震で聖堂が崩壊して一人も助からなかったとか、世界中に起こるその様な悲劇を聞く時、神様はなぜそんなひどいことをお許しになるのか、どうして何もして下さらなかったのかと思ひ、神様に祈る勇気も失せてしまいます。この事をどの様に考えたらよいのでしょうか。

「人間苦と神の摂理」の問題は時代を超えた神秘です。普段は忘れていますが、大悲劇が起こる度に私達は繰り返しこの疑問に苦しめられます。でもこれに対する明確な答えは誰にもありません。聖書を見ても、旧約聖書もイエス様も、私たちが求めているような答えは与えられず、代わりに二つの事がそこに示されています。一つは、人間の苦しみや不幸を一段と大きい展望のもとに置くということです。私たちに神を、「苦しみから助け出す」より「苦しみをあがなう」御者として見させてくれる展望です。二つ目は、どんな悲劇や不幸の中でも神は「共に苦しむ」御者として私達と「共にいて下さる」ことを保証しておられるということです。

旧約聖書には神の民に起こった悲劇の話が数多くありますが、聖書はそこで、神がなぜそれをお許しになったのか、その時神はどこにおられたのか、については何も言わず、事実を淡々と語るだけです。そして最後にその悲劇が神にどのようにあがなわれているかを述べて、その苦難の間も神が確かに民と共におられたことを明らかにしています。イエスご自身も、親友ラザロを復活させた時、墓の前で涙を流してその妹たちと苦しみを分かち合われ、そのあと力強く彼を生命に呼び戻されました。このことを黙想しますと、イエス様も聖書の示すこの二つの展望のもとに、この問題に立ち向かうよう私達を招いておられるのだ、ということが分かります。

あの恐ろしい大災害の時、神はどこにおられたのでしょうか。神は人々と共に苦しみ、嘆き、泣いておられました。倒壊した建物の中で、無数の遺体とともに、苦しみに沈んで。神はスーパーマンのように救ってはくれません。でも確かにそこにおられます。そして失われたすべてのものをきつとあがない、回復して下さいます。亡くなった一つの命も、ついでた一つの夢も、あがなわれぬまま残されることは決してありません。最後に、神の時に、すべてはあがなわれ、治され、回復されます。そう私たちは信じているのです。